

言語研究の接点

—理論と記述—

抜 刷

英 宝 社

反復と省略のレトリック

—関連性理論からのアプローチ—

塩 田 英 子

1. はじめに

言語表現は必ずしもすべてがその場で完全に理解されるわけではない。修正されることもあれば、一度保留され、後になってその効果が得られる場合もある。また、受け手の意図に反して伝達される可能性もある。このような事態はなぜ起こるのだろうか。本稿では、Sperber and Wilson (1986, 1995) に基づく関連性理論 (relevance theory: 以下、RT と略記) の観点から、反復と省略という一見正反対の修辭的技巧を例に考えてみたい。そして、すべての刺激は適切に解釈されるという立場を採ってきた従来の理論とは異なり、RT は解釈の保留やコンテクストに応じた分析が可能である柔軟な理論であることを示したい。

2. 関連性理論と弱い推意

2.1. 関連性の原則と表意・推意

RT は関連性の原則 (principle of relevance) に基づき、コミュニケーションの仕組みを解明しようと試みる理論である。

(1) Principle of relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (Sperber and Wilson 1986, 1995: 158)

RT では、刺激の受け手はみずからに向かって発せられた刺激がなんらかの点で関連性がある、つまり、解釈するに値する刺激として受け取るという立場を採る。この刺激には、言語刺激はもとより、身振りなどの非言語的

刺激も含まれる。さらに、RT では、刺激を表意 (explicature) と推意 (implicature) にわけられている。

表意とは発話によって伝達される明示的想定を言う。発話のコード化された論理形式の発展ならば、表意である。表意には、言語的意味の解読に加え、一義化 (disambiguation)、飽和 (指示付与) (saturation [reference assignment])、自由拡充 (free enrichment)、アドホック概念形成 (ad hoc concept construction) という 4 つの語用論的プロセスも含まれる。

これに対して、推意は発話によって伝達される非明示的想定のことを言う。記憶や表意とコンテキストとの相互作用から引き出されたり、時には、作り出されたりする。例えば、ある同一の刺激であっても、コンテキストが異なれば、解釈が異なる場合がある。そのような例においても、RT は、臨時の推論 (nonce-inferential implicature) に基づくがゆえに、コンテキストに応じた分析が可能となる。

2.2. 反復と詩的效果

反復による効果には、表意に関わるものと推意に関わるものがある。(2) と (3) は前者、(4) と (5) は後者をそれぞれ表す。

(2) a. There were houses, houses everywhere.

b. There were many houses everywhere.

(3) a. I shall never, never smoke again.

b. I shall definitely never smoke again.

(4) There's a fox, a fox in the garden. [強い推意による文脈含意の増大]

(5) My childhood days are gone, gone. [弱い推意による詩的效果]

(Sperber and Wilson 1986, 1995: 219)

(2a) の場合、“houses” の繰り返しは、(2b) のように、“many houses” と表現することができる。また、(3a) の場合も、“never” の繰り返しは、(3b) の “definitely never” と解釈できる。これらはすべて言い換えが可能なことから、命題形式、つまり、表意の改変に関わる例である。これに対して、(4) と (5) は推意に関わる。(4) は文脈含意 (contextual implication) を増大

させる強い推意 (strong implicature), (5) は詩的効果 (poetic effect) をもたらす広範囲にわたる弱い推意 (weak implicature) を生み出す。また, (4) の強い推意は伝達者が責任をもつ確定的な推意であるのに対して, (5) の弱い推意は受け手が責任をもつさまざまな推意の集合でもある (東森・吉村 2003: 54)。例えば, (4) では, 受け手を “fox” がもつ「ニワトリを襲う動物である」という百科事典的項目 (encyclopaedic entry) にアクセスさせることで, 「庭で飼っているニワトリに危険が迫っている」という推意を伝えていると考えられる。また, (5) では, さまざまな思い出に溢れる伝達者の子供時代がすぎ去ってしまったということが深い含蓄をとまって語られる。例えば, (5) がもたらすとされる詩的効果について, RT では, (6) のように定義し, (7) のようなさまざまな推意を生み出すと考える。

- (6) Let us give the name *poetic effects* to the particular effect of an utterance which achieves most of its relevance through a wide array of weak implicature. (Ibid.: 222)

- (7) *My childhood days are gone, gone.*

想定: a. Childhood days are innocent.
b. Childhood days are ingenuous.
c. Childhood days are carefree.

推意: a. The speaker's days of innocence are gone.
b. The speaker's days of ingenuousness are gone.
c. The speaker's carefree days are gone.

(Pilkington 2000: 126; 東森・吉村 2003: 173)

2.3. テキストと詩的効果

先の例は, 言わば, 文レベルでの効果であった。この効果はテキストのレベルでも見られるのであろうか。ここでは行の単位で逐語的になされる反復, リフレイン (refrain) を例に考えてみたい。

- (8) “Her Anxiety”

Earth in beauty dressed
Awaits returning spring.
All true love must die,

Alter at the best
Into some lesser thing.
Prove that I lie.

Such body lovers have,
Such exacting breath,
That they touch or sigh.
Every touch they give,
Love is nearer death.
Prove that I lie.

(Yeats 1930: 312)

(8) では、繰り返し、波が砕けるという語源 “refrainger” の通り, “*Prove that I lie*” という 1 文が、各スタンザの最後で寄せては返す波のように反復されている。反復される元となった部分と反復された部分の間には距離があり、テキスト全体にわたって現れる。以下、(9) に 1 度目の、(10) に 2 度目の “*Prove that I lie*” の表意をそれぞれ示す。

(9) *Prove that I lie*

文脈: All true love must die, alter at the best into some lesser thing.

表意: The speaker requests the hearer to prove that all true love lasts forever.

(10) *Prove that I lie*

文脈: Every touch lovers give, love is nearer death.

表意: The speaker requests the hearer to prove that love lasts forever.

これらを組み合わせると、最終的には (11) のようにも解釈できる。

(11) The speaker strongly requests the hearer to prove that love lasts forever.

(11) は (3) の文脈含意の強化に当たる。しかし、これでは語り手が “love” について考える肯定と否定の間を揺れ動く微妙な感情、まさにタイトルにあるような “[a]nxiety” が解釈しづらい。さらに、受け手は “*Prove that I lie*” の表意を復元する過程で “lie” の意味を一義化 (disambiguation) しな

ければならない。その際に、「嘘をつく」(tell a lie)と「横たわる」(be in bed)という意味の多義性が出てくる。例えば、初めはただ「嘘」としか解釈できなかった“lie”をリフレインで「横たわる」と修正することもありうるだろう。(7)にならって、(8)のリフレインを詩的效果として解釈すると以下のように分析できる。

(12) *Prove that I lie, Prove that I lie.*

想定: a. All true love must die, alter at the best into some lesser thing.

b. Every touch lovers give, love is nearer death.

c. The speaker expresses “Her Anxiety.”

d. The speaker is in love with someone.

推意: a. The speaker requests the hearer to prove that love lasts forever.

b. The speaker requests the hearer to prove that love lasts forever.

c. The speaker requests the hearer to prove whether she tells a lie or not.

d. The speaker requests the hearer to prove that she is in bed with her lover.

(12a) や (12b) は、(12c) や (12d) と比べてアクセスしやすいため、強い推意と考えられる。これに対して、(12c) や (12d) は弱い推意である。このように、“*Prove that I lie*”は強弱さまざまな推意を伝える。また、1度目の“*Prove that I lie*”で1度解釈が保留され、2度目の“*Prove that I lie*”で確定されとも考えられる。つまり、リフレインによって推意が増加し、豊かな情動効果が得られるのである。

3. 省略と修辭的残像

3.1. 省略と飽和

反復と省略は、従来、正反対の表現として考えられてきた。一方は冗長な表現、他方は表現の不足といった具合である。RTの観点からすれば、前者は推意、後者は表意に関わる。しかし、両者によってもたらされる間にはある共通した表現効果が見られる。反復の場合、先に見た(4)や(5)のような推意によってもたらされる効果がこの間によってもたらされる。一

方、省略については、Carston (2001) が表意復元の際になされる飽和という概念を用いて分析している。

- (13) a. Paracetamol is better. [than what?]
b. It's the same. [as what?]
c. He is too young. [for what?]
d. It's hot enough. [for what?]
e. I like Sally's shoes. [shoes in what relation to Sally?]

(Carston 2001: 7)

飽和は発話に適切な文脈価値が見出せる言語的要素がない場合になされる (Carston 2001: 7)。つまり、発話の論理形式がなんらかの補完を要求するような場合である。また、補完は言語的要素ではなく、コンテキストから得られた要素によってなされる。つまり、飽和は受け手に文脈の呼び出しを促すと言えよう。ここで (8) の中で飽和を要求する表現と飽和によって補われた発話を示してみたい。

- (14) a. All true love must die, alter at the best into some lesser thing. [than what?]
b. All true love must die, alter at the best into some lesser thing than it used to be.
(15) a. Every touch they give, love is nearer death. [than what?]
b. Every touch they give, love is nearer death than the beginning.

ここで注目すべきは、(9) や (10) で推意が引き出される際に用いられた想定と飽和される部分がほぼ同じだということである。ここでテキスト解釈に深く関わる部分であるとも言える。つまり、(14a) と (15a) はテキストを受け手に示す中で受け手にもっとも顕在化したい想定と考えられる。

3.2. 修辭的殘像と詩的効果

今まで見てきたように、(8) における反復(リフレイン)は弱い推意、省略は飽和という概念によって説明が可能である。しかし、反復(リフレイン)と省略の違いは単なる推意と表意の違いにすぎないのだろうか。ここで

は、外山 (1961, 1976) が省略の文学形式である俳句に現れる切字の効果について用いた「修辭的殘像」という概念に注目して考えてみたい。

(16) 古池や蛙飛び込む水の音

(17) 古池の蛙飛び込む水の音

外山 (1976) によれば、(16) の句中の断切空間と (17) の句末の切れ字では余韻に差があると言う。(16) の場合は、「古池や」のあとの空間で古池の殘像が、後に続く「蛙飛び込む」という表現と重なり合い、「殘曳の虚像と字句の実像とが葛藤を生じている」(外山 1976: 30) とする。このような二重葛藤的な言語的イメージの殘曳は修辭的殘像と呼ばれている。

(18) ことばからことばへ潜在的に流れている修辭的殘像は、ことばの切れた空間に出会うとそのイメージを顕在化させる。(外山 1976: 27)

つまり、(16) の例は、「や」という切れ字によって、「古池」の想定が広範囲にわたって活性化され、さまざまな推意を伝達していると考えられる。これは RT で言う弱い推意によってもたらされる詩的效果と非常に近い。以下、その例を (7) にならって示す。

(19) 古池や蛙飛び込む水の音

想定: a. 古池は人気がなく寂れている。

b. 古池は静かである。

c. 古池は作者が身を投げた川のことだ。

推意: a. 人気のない寂れた池に蛙が飛び込む音がする。

b. 静かな池に蛙が飛び込む音がする。

c. かつて蛙 (作者) が自殺を試みた川に蛙 (作者) が飛び込む音がする。

「や」は受け手に「古池」のイメージを顕在化させる。これは (12) で見た反復がもたらす詩的效果と非常に近い。切れ字という省略の技法と反復であるにも拘らず類似した効果をもたらすと言えよう。

3.3. 省略と喚起的機能

前節で、俳句に見られる省略の技法は詩的效果と似た効果を生み出すことがあきらかになった。これは(8)にも当てはまるのだろうか。飽和によって補完された発話と想定の結果得られる推意を以下に示してみたい。

- (20) All true love must die, alter at the best into some lesser thing than it used to be.

想定: a. The speaker's love used to be pure.
b. The speaker's love used to be platonic.
c. The speaker's love used to be strong.

推意: a. The speaker's love must alter at the best into a less pure thing than the best.
b. The speaker's love must alter at the best into a less platonic thing than platonic one.
c. The speaker's love must alter at the best into a less strong thing than strong one.

- (21) Every touch they give, love is nearer death than the beginning.

想定: a. The beginning of the love was naive.
b. The beginning of the love was immature.
c. The beginning of the love was dreamlike.

推意: a. The love is less dreamlike than the beginning.
b. The love is less dreamlike than the beginning.
c. The love is less dreamlike than the beginning.

(20) では“some lesser thing”を、(21)では“death”のイメージを顕在化し、後に続くリフレイン“*Prove that I lie*”との間にある不安定さをも表現していると言えよう。

4. 詩的效果と喚起的機能

4.1. 詩的效果と処理労力

(8)の反復(リフレイン)も省略も、広い意味では、詩的效果をもたらす。しかし、この詩的效果を得るには多くの弱い推意を呼び出さねばならない

ため、処理労力 (processing effort) がかかる。処理労力と呼び出し可能性 (accessibility) について RT では以下のように定義する。

- (22) ... the less accessible a context, the greater the effort involved in accessing it, and conversely. (Sperber and Wilson 1986, 1995: 142)

反復や省略はなぜ労力を受け手に課すのだろうか。これは以下の理由による。

- (23) ... the effort that the hearer expends is rewarded by a closer relationship with the poet. (Blakemore 1992: 173)
- (24) ... poetic effects create common impressions rather than common knowledge. (Sperber and Wilson 1986, 1995: 224)

詩的効果は読者 (受け手) に伝達者の意図した想定やコンテキストを顕在化させ、テキストとの深い関わりをもたらす。そしてテキストに対する共通の印象を与えるのである。しかし、(25) に示すように、想起情報 (reminder) がなんら新たな文脈効果をもたらさず、同じ情報である場合は余分な労力を課すことになり、重複 (redundancy) の例となる。

- (25) ... when a reminder comes after the speaker is trying to bring to the hearer's attention, then the extra effort needed to process an utterance which carries no new contextual effects is wasted, and redundancy rather than relevance is the result. (Ibid.: 149-50)

上記から、反復によるさまざまな推意の呼び出し可能性が高ければ高いほど、重複として受け取られやすくなると言える。これは、受け手が処理を放棄した場合も同様である。つまり、受け手が費やした労力は無駄になり、不要な情報として破棄される可能性が生じると言える。

4.2. 解釈の保留と詩的効果

ここで解釈の保留とこれらの修辭的技巧についてまとめてみたい。反復や省略が修辭的残像と似た効果をもつのは先述の通りである。仮にこれら

の表現がなければ、受け手はテキストを誤解したり、解釈できないという可能性もある。また、テキストに見られる反復や省略はテキスト内、あるいはテキスト外の想定を呼び出すことによって解釈される。例えば、(12)はリフレインされていなければ、“lie”の一義化や推意を引き出すことが困難である。このことは保留についても当てはまる。例えば、“lie”の意味が確定できず、解釈を保留にしたまま読み進めると、2度目の“lie”によって先の意味がよりはっきりとわかり、解釈を確定することが可能となる。また、省略の場合も省略されている言語的要素を復元できない場合、解釈が保留され、後のコンテキストとの関係によってあきらかになる場合も考えられる。

Uchida (1998) は、作者によって意図された意味を得るまで、あるスキーマが不確定のままにされている状態を“suspense”と呼び、以下のように定義している。

- (26) suspense: the readers are left in a state of ‘suspense’ throughout the time in which they cannot identify or specify the ‘deviant’ relationships in the text.
(Uchida 1998: 163)

また、作者が読者を“suspense”の状態に置くことに成功すれば、テキスト全体を通して一貫した効果を作り出すことができる。そして、読者が“suspense”の状態から解放された時、読者は初めに“suspense”の状態になった場所までさかのぼり、新たに得た観点からテキストを再び解釈すると言う (Uchida 1998: 163)。このことは、(8)の反復や省略の例にも見られる。中でも、とりわけ、リフレインや省略はこの意味で保留の効果をもたらしているとも考えられる。

4.3. 反復・省略と文体

ここで反復や省略といった異なる表現を同一のものとして解釈するには無理が生じると考えられるかもしれない。しかし、RTではスタイルの違いを以下のように定義している。

- (27) Stylistic differences are just differences in the way relevance is achieved.
(Sperber and Wilson 1986, 1995: 224)

つまり、反復も省略は最終的には関連性を達成するが、その達成のされ方に違いがあるということである。反復は弱い推意によって、省略は表意に関わる飽和を促すことで、関連性が達成されると結論づけられるであろう。また、Yus (1998) は以下のように述べている。

- (28) ... the author of the text can only *hope* that the would-be addressee will be able to pick up the intended interpretation, but there is no way to check the final quality of that interpretation. (Yus 1998: 295)

このことからうかがえるのは、テキストの作者(伝達者)はみずからが望んだのと同じ解釈を読者(受け手)に求めることしかできないということである。それゆえに、反復や省略などといった修辭的技法を用いて情緒的相互性をもたせる。つまり、これらの技法はすべてこの意味で受け手を伝達者の望んだ解釈へと導く表現手段ということになる。

5. おわりに

反復も省略もコンテキストに対する強い喚起力をもつ。このことは言語表現だけで、すべて思考を伝えることができないというもどかしさも示している。つまり、反復や省略は送り手と同じコンテキストへと受け手を誘うためのレトリックと言えるのである。また、“suspense”のように、テキストを読み進めることによって同定を可能にする保証を与えている場合もある。しかし、これらの効果を得るには労力がかかるため、問題も多い。伝達者が望んだ解釈を得るための労力を受け手が惜しめば効果は得られず、その結果、先に述べた「冗長さ」や「表現の不足」などといった事態が生じてしまう。RTの観点からすると、反復や省略はこの意味でコンテキストの呼び出しを求める標識であり、テキストを介した伝達者と受け手の相互性を深める手段と位置づけることができよう。

参考文献

- Blakemore, D. 1992. *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Basil Blackwell. (武内道子・山崎英一訳. 1994.『ひとは発話をどう理解

- するか』東京：ひつじ書房).
- Carston, R. 2001. "Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction," *UCL Working Papers in Linguistics* 13, 1-34.
- 東森勲・吉村あき子. 2003.『関連性理論の新展開：認知とコミュニケーション』東京：研究社.
- Pilkington, A. 2000. *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*. Amsterdam: John Benjamins.
- Sperber, D. and D. Wilson. 1986, 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell. (内田聖二・中達俊明・宋南先・田中圭子訳. 1999.『関連性理論—伝達と認知—』第2版. 東京：研究社).
- Uchida, S. 1998. "Text and Relevance." *Relevance Theory: Applications and Implications*. R. Carston and S. Uchida (eds.). Amsterdam: John Benjamins.
- 外山滋比古. 1961.『修辞的残像』東京：垂水書房.
- 外山滋比古. 1976.『省略の文学』東京：中央公論社.
- Yeats, W. B. 1994. "Her Anxiety." *The Poems*. D. Albright (ed.). London: J. M. Dent.
- Yus, F. 1998. "Relevance Theory and Media Discourse: A Verbal-Visual Model of Communication." *Poetics* 25, 293-309.